冬眠する山口県のヤマネ

「ほっとやまはく」タイム㉘

なり、雪の中を動き回ります。山中の森に暮らすリスの仲間であるニホンモモンガや里山の森に暮らすムササビも活動します。大型哺乳類であるニホンジカやイノシシも、中型哺乳類であるニホンザル・タヌキやキツネも活動しています。

冬も活発に活動するきれいな冬毛のニホンテン

自然の中で暮らす野生動物は、四季の変化に適応しながら生活しています。冬でも多くの哺乳類が活動しています。ニホンテンは鮮やかな冬毛と

山口県のヤマネ

哺乳動物の中には、冬眠をする仲間がいます。代表はヤマネです。ヤマネは、日本の本州、四国、九州の森に生息する、体重わずか20グラム前後のリスやネズミの仲間であるげっ歯目ヤマネ科の小型哺乳類です。県内での正確な生息状況はいまだ不明ですが、県東部の岩国市、周南市、山口市、萩市などの、広島・島根県の県境沿いの西中国山地の山の森に広く生息しています。夜行性の樹上性動物で、森の木々を枝から枝に渡り歩き、昆虫やクモなどの動物や、植物の花の花粉や蜜、軟らかい木の実などを食べています。

夏に巣箱を利用して休息するヤマネ

出産・子育て

ヤマネは樹洞といわれる枝が枯れた後にできる木の穴や、キツツキなどが空けた穴、枝のつけ根などで昼間は寝ています。

生後約20日のヤマネの幼獣

出産・子育ては8～11月、多い時には7匹の子を産み、お母さんヤマネが子育てを行います。授乳期間は約1カ月、子ヤマネたちは母親の元を去り、その後自分で餌を取り独立して生活します。また、野鳥の巣箱なども利用することが分かり、調査には、幹側に出入り口のあるヤマネ用巣箱を、森の中の木々の人の目線の高さに設置し、観察を行いました。ヤマネはスギなどの樹皮を自らの歯で剥いで、口にくわえて巣箱に持ち入り、球形の巣を作り、休息、出産・子育てを行いました。

体重変動と冬眠

冬眠前の太ったヤマネ

冬眠前の成獣ヤマネは体重30グラム超

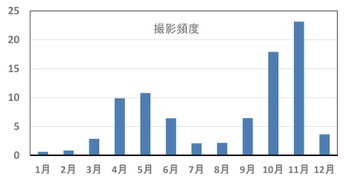
巣箱の中で寝ているヤマネたちの体重測定も行っています。春先の個体は16～20グラム、夏前までにほとんどの個体は20グラムを超えていました。冬眠前の11月には成獣は30グラムを超える個体もいました。

12月、ヤマネたちは冬眠に入ります。秋に生まれた幼獣も自分たちの体に合うサイズの巣材で冬眠のための球形巣を作りその中心で冬眠していました。ヤマネの冬眠は体温を5度近くまで低下することが知られています。呼吸数も低下し、代謝を抑えて、エネルギー消費量を極端に減らし、冬を乗り越えます。秋、1・5倍近く体重を増加させ、蓄積した脂肪により何も食べず、冬を過ごします。

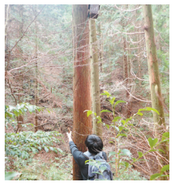
ヤマネは冬眠中一度も起きないのでしょうか。そうではないようです。体温を下げっぱなしでなく、5度近くまで体温が下がりしばらくその状態が続くと、今度は急激に体温を平常体温まであげることを繰り返します。これを中途覚醒といい、体温が上がった時に一時的に目覚めることがあるようです。

自動撮影

巣箱を設置した木の近くに自動撮影カメラを置いて、巣箱を利用する様子を、年間通して撮影しました。これまでの2000日を超える撮影で、各月のヤマネ撮影数を、各月の撮影日数で割った数値に100を掛けた値を撮影頻度として示しました（グラフ参照）。12月～翌年3月は、ほとんどヤマネは撮影されませんでした。4月から撮影数は増えましたが、7、8月と撮影数は少なくなりました。ヤマネの子どもたちが分散する10、11月には特に撮影数が多く、ヤマネの巣箱周辺での活動が増えていることが分かります。7、8月は巣箱をあまり利用しなくなったため、巣箱周辺での活動が少なくなったと考えられました。冬眠している1月と2月にもわずかながら撮影されています。これらの個体は中途覚醒後、冬眠場所を移動した個体ではないかと思います。



自動撮影カメラによるヤマネの撮影頻度



自由に昇降できる高所架設巣箱

現在、ヤマネの調査は、山口大農学部の細井先生の研究室の学生が中心になって行っています。巣箱の設置を従来の人の目線の高さから、5メートルの高さに設置する高所架設方法を考え出し、巣箱のヤマネの利用頻度が大きく向上しました。それにより調査地内の正確な個体数が分かってきました。巣箱に滞在した時にふんをしてくれることがあり、ふん分析によりヤマネの食性が明らかになりつつあります。10年以上続くヤマネの調査により、山口県のヤマネの生活史の解明が進んでいます。

田中浩（動物担当学芸員）

▽次回は21日です。

山口県立山口博物館
ＴＥＬ083－922－0294
月曜休館（祝日の場合は翌日）。
最新情報はホームページで